快晴風

第3号

青森県気象予報士会会報

2002 年 12 月 20 日

予報士会の底辺拡大を

青森県気象予報士会会長　　工藤　淳

予報士会のお手伝いをほとんどしないうちに３年間が過ぎようとしています。中でも、予報士会のホームページがこの時代に更新されないということにはまったく残念で、心苦しく思っております。

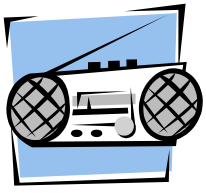
なにしろ、気象事業も不景気のあおりを受け、民間気象会社は生き残りに懸命です。すでに数社は撤退し、当社も３年連続の赤字決算で、自分のすべての時間を会社存続に向けているため、会員の皆様には申し訳なく思っております。

さて、気象技術は日々進歩を続けていますが、気象庁は１１月２９日、季節予報が現在の形になって初めて「３か月予報の一部修正」をするなど、思いがけないことが起こっています。

地球温暖化やエルニーニョ現象が顕著になっているとは言え、地球上の天候には何か異変が起こっているように思えます。このような時だからこそ、こつこつと天気予報の技術を磨き、時代に求められる気象予報士を目指さなくてはなりません。

私が担当しているお天気教室では、毎回気象通報を聞きながら天気図作成にチャレンジしていますが、主婦の方でも直接プロットできるまでになりました。

予報士会は、これからも受験対策の勉強会をメーンにしながら、底辺の拡大にも活動を広げて、「気象は楽しいものだ」ということを県民のいろいろな方々に普及できたらと思っております。



舘山会員が試験に合格！

平成１４年１月に実施された「平成１３年度第２回気象予報士試験」で舘山龍彦会員がみごと合格されました。おめでとうございます。（正確には、合格後の入会です）

当会主催の勉強会に熱心に参加されるなど日頃からの努力の賜物だと思います。今後は指導する立場として活躍されることを期待します。

平成１４年度定期総会で役員を再選

去る４月２０日（土）、青森市において平成１４年度青森県気象予報士会定期総会を開催した。会員２９名（当時）のうち、出席１３名、委任状提出１３名で総会は成立した。

総会では、平成１４年度役員人事、１３年度決算、１４年度予算案ならびに１４年度事業計画案などが審議され、可決された。

平成１４年度役員は以下のとおり

会　長　工藤　　淳（㈲アップルウェザー）

副会長　田嶋　研逸（㈱吉田産業海洋気象事業部）

副会長　岩井　弘樹（青森地方気象台）

幹　事　金田　浩治（中日本航空（株））

幹　事　児玉　安正（弘前大学理工学部）

幹　事　藤村　博明（㈱青森テレビ　技術局）

幹　事　岡前　憲秀（青森空港管理事務所）

会　計　伊藤　宏幸（㈲アップルウェザー）

会計監事　山田耕司（青森県林業試験場）

今年度の新入会員

一戸將人氏、浅野元氏、桑嶋克幸氏ならびに舘山龍彦氏が新たに入会されました。

平成１４年１２月現在の会員数　　３０名

第９回定例幹事会に出席して

浅野　元

去る平成１４年７月５日、弘前大学理工学部地球環境学科内で第９回定例幹事会が開催され、出席させていただきました。報告に先立ちまして児玉幹事の御厚意により、会場を提供していただきましたことに厚く感謝いたします。

また役員以外の一般の会員も、幹事会に参加し意見を述べることができるという開催方法は、役員の負担軽減になり、また当会の健全な発展のためにもよいことですので、今後も継続していただきたいと思います。

さて、幹事会の方は岡前幹事からのメールによる報告にもありましたとおり、①１４年度見学会について　②見学会担当幹事について　③当会のＨＰについて　④ウォッチング青森（青森県自然観察指導員連絡会）例会への参加について　⑤次会幹事会例会について　等が検討されました。

見学会については、会員各個人の都合のみならず、先方の都合もあることなので見学先や開催時期を決めるのが難しいようです。

ＨＰの作成は、個人の負担によるところが大きく、会員のほとんどが社会人で多忙であるなか試作をお願いしている藤村幹事には恐縮です。

幹事会の後は、事実上の見学会として、児玉さんの研究室を見せていただきました。

児玉さんの指導のもと、学生が作成中の青森県内アメダスデータをもとにした「気象暦」は、作成は手間がかかる地道な作業だろうと思いましたが、その後同大学のＨＰで公開され、私も青森県内での趣味の写真撮影の計画を立てるのに参考にさせていただいております。

そのほか、研究生の山田さん、助手の石田さんから研究内容の説明をしていただいたり、農業生命学部所有の露場を拝見させていただきました。

幹事会、見学会が終了した後は、弘前市内で懇親会が行われました。その中での話題で、児玉さんの「南米にも梅雨があることを発見した」という発言には「目からウロコ」でした。

単に幹事会への参加ということだけでなく、会員相互の情報交換にもなり有意義な一日でした。今後もできるかぎり幹事会その他の行事にも参加していきたいと思います。

私の合格体験記

舘山　龍彦

私が気象予報士勉強会にはじめて参加したのは２年ほど前でした。それまでは通信教育などを使って一人で勉強していましたが、「仲間がいたらわからないことを質問できたり、情報交換できるのになあ」とずっと思っていたので、仲間に加えていただいた時はとてもうれしかったのを覚えています。

勉強会では理解できない所を詳しく説明してもらったり、いろいろな受験テクニックを教えてもらったりして、やはり参加してよかったなあと思いました。

さて、私の勉強法を少し紹介しますと、少しの時間でもいいのでコツコツ毎日やるということです。私も仕事を持っているので時間が限られています。そこで昼休みに昼食を食べた後などの細切れの時間を有効に使うことです。それと自分でまとめたノートや過去問を繰り返し繰り返しやることです。これは飽きてくるのですが、続けているといつのまにか力がついてくると思います。やはり継続は力なりということでしょう。

私は４回目の挑戦で合格できたのですが、１回目は全滅、２回目は学科が２つ合格、３回目の実技は手応えを感じたのでいけるかなと思っていたのですが結果は×。ショックでした。さらに不合格とわかった数日後に妻が入院してしまい、家事や育児に追われ満足に勉強できなかった４回目はあまり手応えが感じられず、今度もダメだろうなあと思ったので試験のことは忘れるようにしていました。そして発表の日、おそるおそるハガキをめくってみると、何やら今までとは違う雰囲気。よく目をこらして見ると小さな字で「第１７回気象予報士試験に合格したことを証明する。」と書いてありました。合格なんだからもっと大きな字で書けよと思いながらも、思わず「やったー」とガッツポーズでした。

以上私の合格体験を書いてみましたが、気象予報士会の皆さんには本当にお世話になりました。今度は私が気象予報士を目指す人に多少なりともアドバイスしていきたいと思います。また、せっかく苦労して取った資格なのでこれからも地道に勉強を続け、何かの役に立てたいと思います。どうもありがとうございました。

２００２年　私のベスト５

一戸　將人

みなさんお元気ですか。今年は私にとって雲の当たり年でした。雲の写真は気象条件でだいたい予測できるから、簡単に撮影できるなどと思ったら大間違いです。その多くは偶然見て出会い、その瞬間を切り抜いた「作品」ばかりです。まして、仕事中に撮るわけですから（ここだけの話です）さらに偶然の確率は小さくなります。その中で今年の「ベスト５」を選んでみました。

まずは第５位から。７月の早朝に浪岡町付近で撮りました。朝日の出る少し前、下層にまるで墨汁で塗ったような幻想的な光景でした。種類からいうと層積雲のなかに入るのでしょうか。

第４位は積雲と巻積雲の波状雲で、９月に弘前市内で撮りました。秋空で二種類の雲のコントラストが印象的でした。

第３位は夕暮れ時に出た虹です。かなり鮮やかに出ましたが、良く見ると虹の内側と外側の大気の色が違うのがわかります。ドーム状虹と名づけました。

第２位は５月に藤崎町付近に出た吊るし雲です。下層雲で構成されておりしばらくの間動かずに留まっていました。形状から中三デパート雲と名づけました（弘前周辺の方でしたら納得？）

第１位は６月１０日にむつ市で撮影した「幻日げんじつ」です。幻日は太陽と同じ高さに並んだ位置に明るく輝くスッポトや虹のような光が現われる現象です。私は最初太陽の周りが赤く「光冠」かと思ったほどで、まさにまぼろしの太陽でした。１０分するほど下の写真のように本当の太陽が顔を出し、幻日は垂直な虹のように変化しました。この時の空は巻雲が実に見事でしばらく見入っていました。

ウォッチング青森との活動交流について

岡前　憲秀

１．はじめに

今年度からウォッチング青森（青森県自然観察指導員連絡会）さんとの活動交流を行っていますが、そのキッカケは意外な「人と人との繋がり」から始まったのでした。

当時はまだ、青森県気象予報士会の会員ではなかった埼玉県の浅野元さんが、写真撮影等で頻繁に青森県を訪れている関係で、八甲田山系の情報提供をしているホームページを探していたところ、ウォッチング青森の棟方さんが開設しているホームページを見つけたそうです。その後お二人はメールなどで情報交換などされていたそうですが、ふとしたことから「気象予報士会」の話題になり、青森県に気象予報士会が出来たことを知っていた浅野さんが、私のところに問合せのメールを送られてきたのでした。いわば「埼玉県経由」で、ウォッチング青森と青森県気象予報士会とがお互いの名前を知るところとなったのです。

２．浅野さん仲人によるご対面

しかし、その後は具体的な接触はありませんでした。ところがやはりここでも浅野さんがポイントとなりました。浅野さんは趣味（の域を越えている腕前です）の写真撮影のために、何度か青森市にお出でになっていたので、私は浅野さんと会う機会を持ちました。いろいろとお話をしているうちにウォッチング青森さんのことが話題となり、「同じ青森県で、自然観察と気象の違いはあるけれども、どちらも自然を対象としているのだから、交流を図るべきではないのか」と浅野さんは熱っぽく語られたのでした。

実際のところ、青森県気象予報士会を結成したものの、勉強会以外はさしたる活動を行っていません。ましてウォッチング青森さんのように、外に出て一般の方々を対象とした活動を行うようなノウハウも持たない当会が、いま急に新たな活動を起こすには少し勉強する必要があるかな、との思いは以前から持っていました。ここは浅野さんの勧めるように、「ジョイント」させていただくことにより、一歩前へ進むことが出来るかも知れません。そこで浅野さんのお力添えもあり、両者のご対面と相成りました。

ウォッチング青森さんからは、事務局の平川さん、柳沢さん、そして会員の棟方さん（かなりの酒豪です）、当会からは岩井副会長、岡前、そして埼玉県から浅野さんも駆け付け、６名で平成１４年２月１５日に夕食会を行ったのでした。

３．今年度の具体的な活動

１４年度は初めてのジョイントということもあり、ウォッチング青森さんの例会のうち２回を青森県気象予報士会が担当する、ということで進めることになりました。そして「楽しいお天気の話」と題して、６月１９日（水）と１１月２０日（水）に開催された例会を担当しました。

６月１９日は、岩井副会長が「雲と天気図」、岡前が「青森空港の自然」と題して、２名で担当しました。３０名ほどの参加者があり「山の天気と雲の関係」などのような突っ込んだ質問も飛び出し、活発な意見交換が行われました。

１１月２０日は、弘前大学の児玉さんに担当していただき、「青森市の気象暦」の話や、「津軽地方の降雪について」説明してもらいました。特に津軽地方の降雪については、児玉さんの研究の一部を紹介していただき、予報士会会員としても非常に興味深く、また勉強になりました。ウォッチング青森の皆さんの関心も高く、熱心に聞き入っている様子でしたし、質問もかなり出ました。この２回の「楽しいお天気の話」は、まずまずの成功だったのではないかと思っています。

その他に、私は７月１３日に開催された「ホタル観察会」にも家族とともに参加しました。夜間の観察会にもかかわらず、大勢の方が参加されており改めてウォッチング青森さんの活動規模の大きさを感じました。

４．今後について

ウォッチング青森さんとの一年を振り返りながら、幹事会を中心として１５年度に向けた協議の場を設けることになると思います。１５年度は、青森県気象予報士会の方からウォッチング青森さんへ積極的に働きかけることも検討できれば、と思います。そのためには、青森県気象予報士会の活動そのものの方向性も考えて行かなければならないと思います。当会の皆さんからさまざまな意見を出していただきながら、ウォッチング青森さんとは今後もより良い関係を築いていきたいと思います。

児玉会員の説明に聞き入る参加者（１１月２０日）

青森県の気象と植生について

山田　耕司

気候と植生は密接な関係にあり、植物は気象と地形に対応した場所で生育しています。本文では、青森県の植生について、気候と関連づけながら述べていきたいと思います。

（１）　本県の気候について

本県は、温帯北部の気候帯に属し、平野部では年平均気温１０度、年降水量は１０００㎜ 前後です。また、三方を海に囲まれ、非常に長く複雑な海岸線をもっているため、気温変動の少ない海洋性気候を示す地域が多くあります。

しかし、日本海沿岸には対馬暖流、太平洋岸沿岸には千島寒流が流れているので、両地域では気温が異なります。更に、冬はシベリアからの北西季節風により日本海側では曇りの日や降雪が多く、夏はオホーツク海高気圧から吹き付けるヤマセの影響により太平洋沿岸では日照時間が短く、気温が低くなっています。

（２）　本県の森林植生について

本県は、標高１１００ｍ以下の平野～丘陵部はブナなどの温帯落葉広葉樹林の生育に適しています。ブナは、気候から考えると県内の平野部全体において生育に適しています。また、八甲田山・岩木山・白神山地の標高１１００ｍ以上の山岳部は、アオモリトドマツなどの常緑広葉樹林の生育に適している亜寒帯です。

一方、深浦町・岩崎村などの日本海沿岸南部では対馬暖流の流入により温暖であることから、タブノキやヤブツバキなどの温帯南部の森林も生育しています。ヤブツバキは、関東以西の暖かい地域に生育している常緑の広葉樹林です。分布の自生北限地は、平内町の夏泊半島となっています。これは、南方の暖かい地方でつくられた種子が暖流に乗って北上し、夏泊半島に流れ着いて生育しているものと考えられています。更に、太平洋沿岸ではヤマセの影響により寒冷であることから、イチイやガンコウランなど八甲田山や岩木山の山岳地帯に相当する亜高山帯の植生が海岸地帯にみられます。

このように青森県の植生は、それぞれの気候に対応して複雑な分布をしており、多様な植生を形成しています。

（３）　人間と森林の共存関係について

標高１１００ｍ以下の場所には、平野部も含めて、かつてはブナ林が生い茂っていたことになりますが、現在、ブナ林は白神山地、野辺地の烏帽子岳、むつ市釜伏山などの主に山地で生育しています。これは、かつて人間がブナ林を伐採して森林を利用してきたことで、ミズナラ・コナラなどの広葉樹林に置き換わったものです。

最近ではブナ林の保護が盛んにクローズアップされていますが、人間が利用してきた身近な広葉樹林もブナ林などの原生林に並ぶ重要な自然です。このミズナラ・コナラ・クリなどの落葉広葉樹（最近は里山林といいます。）は、薪などの燃料や食料としてかなり昔から利用されていたようです。

縄文時代中期の遺跡である三内丸山では、大きな定住群落と大量のクリの遺体が発見されています。クリは明るい光を必要とする陽樹であることから、ブナなどの鬱蒼とした天然林の中などでは密生して生育することができません。大量のクリが発見されたということは、人間がブナなどの天然林を伐採し、クリなどの広葉樹を食料や燃料として利用していた可能性が考えられます。また、昭和３０年頃まで、人間は、ミズナラ、コナラ林などの里山林から薪・炭などの多くの生活に欠かせない燃料の供給を得てきました。

しかし、近年では、薪・炭などの木質燃料の使用量は、石油・ガスなどの化石燃料の使用量の増加により減少し、ほとんど使用されなくなりました。このことにより、里山林が利用されなくなり、伐採などが進まず、放置されるようになりました。近頃なおざりにされている里山林ですが、そこには他では生息できない種が多数含まれており、管理を行わなければ種の絶滅を引き起こす恐れがあります。

快晴の八甲田　　撮影：浅野　元

冬の八甲田山の貴重な晴天である。写真撮影にも天候というのは深く関わっている。晴天でないとうまく写せないもの、曇の日のやわらかい光を必要とするもの、いろいろである。撮影に出発する前は、いつも各種解析図、数値予報図とにらめっこである。そして出発した後は、観天望気で天気の変化にたえず注意を払っているのである。

（浅野　元）

徒然なるままに

竹下　秀樹

「会報に原稿を」、と岡前さんから依頼されてからおよそ一ヶ月、ずっと、何を書いたら良いのやら、と悩んでいたが、とうとう締め切り日になってしまった。最近、公私ともに“気象”というものから、とんと遠ざかっているのだが、会報の原稿となると、やはり「育児日記」ではまずかろう。やはり「気象」をネタに、徒然なるままに書き進めていくことにする。

そもそも、私と「気象」との出会いは、放送局に入って最初にやらされた天気予報のテロップづくりで、最近はあまり見かけなくなった「晴れ時々くもり」とか「雨のち雪」といった文字を字幕表示するための作業であった。テロップ作りは、ガラスに書かれた反転した文字を１文字づつ撮影する“写植機”という機械を使い、印画紙に文字を写し現像・焼き付け反転し、黒地に白文字の”テロップ”を作るという手間のかかる作業だった。天気予報のテロップは、あらかじめ作り置きしてある「晴れ時々くもり」といった文字の部分を貼るだけの作業だったが、サービス版より少し大きいくらいの印画紙の上に貼るものだから、少しの歪みも画面では大きな歪みになるし、白い部分があると、そのまま画面に現れてしまうなど、失敗もたまにあった。

当時は、予報も気象台から決まった時間にかかってくる一斉電話で受け、受話器を持って用紙に書き取り、それをもとに天気予報の原稿とテロップを作る、というもので、今思うと“古き良き時代”という感じである。天気予報そのものも、どちらかというと、地味で、ニュースの添え物的な存在だったように思う。とはいえ、たかだか、今から１５年ほど前のことである。

それからおよそ１０年間、私はアナウンサーという立場で天気予報を伝えることに係わってきたが、写植で作っていたテロップは、数年後にはコンピュータ化され、一斉電話はファックスに変わり、その後、急速にコンピュータを介して届く情報が主流になっていった。と同時に、天気予報も、ＣＧの進歩や予報士制度のスタートとともに、独立した気象情報番組がくまれるほどに成長してきた。この間、変わらなかったのは、テロップをコード番号化した「テロップ番号」だけかもれない。

ここ４年間は、報道制作の現場を離れ”視聴者”として天気予報を見てきたが、最近は、「天気予報」と言わず「気象情報」と言うことが多くなってきたような気がする。言い方が変わってきたのは、送り出す情報も、求められている情報も、大きく変わってきたからかもしれない。「天気予報」を「料理」に例えると、「天気図」などの「素材」や「アメダスデータ」などの「原料」が情報として積極的に利用されるとともに、情報として求められてきたことの現れかもしれない。最近、北海道放送のホームページ（http://www.hbc.co.jp/ ）で、”専門天気図”というページが設けられたが、番組やニュース、天気予報へのアクセス数を大きく上回っているようだ。気象庁が観測データを、今年から、インターネットを使いオンタイムで公開する（http://www.data.kishou.go.jp/）ようになったのも、素材への需要の高まりからかもしれない。

かく言う私も、「素材」や「原料」をそのまま見ることが多くなった。というのは、現在、“育児休暇中”で、ほぼ一日中家にいるが、最もの気になるのは、お天気そのものではなく、気温の経過や湿度、気圧の変化だからだ。なぜなら、我が家の赤ちゃんのご機嫌の善し悪しが、どうやらこの３つが関係しているように感じることと、洗濯物をいかに乾かすかが大問題だからである。

たかが天気、されど天気、家に居ながらにして欲しい情報がすぐに手に入るようになったというのは、ほんとに有り難いことだが、反面、放送局のような仕事は、いろんな意味で厳しくなった、そう思う今日この頃。育児休暇明けの来年６月に会社がどうなっているのか“予報”が、少し気になる。

編集後記

今年もいよいよ師走となり、２００２年が終わろうとしています。東北新幹線は八戸駅まで開業し、中央と青森県の距離はまた短くなったのですが、各地方の予報士同志の交流はなかなか進みません。物理的距離よりも「心の距離」を縮めるべきなのかも知れません。２００３年は青森県気象予報士会の「飛躍」の年としたいものです。

お忙しい中、原稿を提供して下さいました皆様に心よりお礼申し上げます。　（前）

快陸風　第３号

２００２年１２月２０日発行（年１回発行）

発　行　青森県気象予報士会

（㈱アップルウェザー内）

発行人　工藤　淳

編集委員　岡前憲秀　藤村博明